

【アピール】「教育のつどい 2011」

父母・国民、教職員 みなさんに呼びかけます

## 今こそ「子どもたちのいのちを慈しみ、 人間として大切に作る学校・地域」を

— みんなの力をあわせて、21世紀の未来をひらく教育をつくりましょう —

子どもたちと教育の未来に心を寄せるすべてのみなさん

8月19日から3日間、千葉県で開催した「教育のつどい 2011」は、全国から集まったのべ6000人の父母・国民、教職員の力で大きく成功しました。「みんなで21世紀の未来をひらく」。この集会名称に込められた子どもたちと教育への思いを共有し、みんなの力で、すべての子どもたちの成長と発達を保障する教育を実現しようと、熱い討論が展開された3日間になりました。

「教育のつどい 2011」は、昨年同様27団体で実行委員会が構成され、また、現地実行委員会は過去最高の55団体（賛同団体を含む）で構成されました。「教育のつどい」の成功に向けて、800人が参加した県内6地域7カ所でのプレ企画の大きな成功など、地域からの積み上げは大きな力となりました。全体集会会場周辺に配布した2万4千枚の案内ビラを見て「参加したい」との電話がたくさんかかりました。千葉大学を会場としてお借りできたことも歴史的な到達点となりました。当日の豪雨の中で奮闘いただいた地元・千葉のみなさんの姿は、全国から参加した教職員、父母・国民への大きな激励となりました。「教育のつどい 2011」を支え、奮闘いただいた千葉のみなさんと全国からの参加者のみなさんに心から感謝を申し上げます。

東日本大震災と福島第一原子力発電所事故から5ヶ月半。復旧・復興はまだその緒についたばかり。原発事故は収束の見込みもたちません。9万人を超える方が避難生活を余儀なくされる一方で、被災地の子どもたちや父母、教職員、子どもと子育てにかかわる多くの人々の懸命の努力で、復興へ向かう希望も生まれつつあることが教育フォーラムや分科会の中で語られました。「効率」や「利潤」が優先され、「自己責任論」がまかり通る新自由主義的な「教育改革」へ進むことを許すのか、私たちがこれまで大切に発展させてきた「子どもたちのいのちを慈しみ、人間として大切に作る学校・地域」を創る方向へ進めるのか。中西新太郎さんは記念講演の中で「私たちは今『歴史の分岐点』に立っている」と語りました。

市民団体・実行委員会参加団体からの34本を含む約400本のレポートは、子どもの実態を見つめ、父母・保護者、そして地域との共同の中で、悩み苦しみながらも一歩ずつ前にすすむとりくみの集成でした。

「席に着け」「教科書出せ」「しゃべるな」と怒鳴りながら授業が始まった。「私はみんなと授業がしたくてここに来ている。みんなと一緒にこの作品を読みながら、互いに学び合いたいと思ってここに来ているのに、なんだ、この教室は。友だちの意見が聞こえないほど私語をするんだ」と言って教室を出てきてしまったこともあった…と語ったレポート。しかしその教室で生徒達は少しずつ夏目漱石を読み始めます。

ファミリーレストランからの通報で、母子はそこで朝まで過ごし、そこから登校していたことがわかります。不登校状態を経てA子は「学校に行くと楽しいことが待っているんだ」と話すようになります。

新任で赴任した学校。学校から帰る途中「誰かこのまま車でひいてくれないだろうか。そうすればあの教室に行かなくて済む」と思うようになり、体重は激減します。薬を飲みながらも、荒れの中心だった子どもの思いと生活に心を寄せて行きます。

Dちゃんの成長を、養護学校の教師集団と保護者がともに綴ったレポート。

中学校を卒業する子どもたちに、社会科教師としてどんなはなむけがふさわしいかと考えてとりくんだ「戦争の加害体験」を聞き考える授業実践。

地域の子育て運動を基盤とした「地区PTA活動」のとりくみ。

ヒグマ、メダカとカダヤシ…など、地域の特性をいかした授業の中で、子どもたちは自らの暮らす地域の良さを感じ取っていきます。

教科書が狙われている状況について、その背景から分析したレポート。

学童保育所や、公民館での活動のレポートもありました。

「もう被爆しちゃってるから、もうどうでもいいや」「なんで俺たちばっかこんな目にあわなきゃなんねえんだ」との高校生の声。「未来をあきらめないために、いま何ができるのだろうか」と福島レポートは問いかけています。

東日本大震災と福島原発事故の被災地から、自らも被災し、最寄りの駅がまだ不通という中で教育フォーラムや分科会にリアルな実態が報告されました。自宅と職を失って生きる希望を無くした親にとって、子どもの笑顔こそが救いであり希望である。学校は子どもを守る最後の砦。「地域の学校」という学校観を大切にされた様々な活動が語られました。

「教育のつどい 2011」は、「31年ぶりの40人学級の見直し」を実現させての開催となりました。しかしその一方でようやく世界の常識に近づいた「高校授業料の無償化」などは、政争の具とされ「見直し」が取りざたされています。教育の中身を充実させるともに、それを支える教育条件の改善を一体のものとしてすすめることの重要性が口々に語られました。そのためにも、教育政策を抜本的に転換させることが重要だとの認識が共有され、各地のとりくみを通じた展望が語りあわれました。子どもと教育を大切に政治を実現し、みんなが21世紀の未来をひらきましょう。

「教育のつどい 2011」には、たくさんの青年が参加し、自らの教育実践に関わる率直な悩みも出しあいながら論議がすすめられました。開会前日には、昨年に引き続き青

年レポーターを囲んだ学習と交流の輪がつくられ、青年のもつ感性と確かな子ども観、実践に共感が広がりました。教育フォーラムや分科会の論議、全体集会での青年の率直な感想が参加者の感動を呼んでいます。

東日本大震災と原発事故を受け止め発信する高校生や大学生、小学生の報告による子ども参加の特設分科会の成功によって、子どもたちとともに未来への希望をつくりあげるといふ確かな方向性を持つこともできました。

「教育のつどい 2011」は、本日、すべての日程を終えます。

全国からご参加いただいたすべてのみなさん、子どもたちと教育の未来に心を寄せるすべてのみなさん。

今こそ「子どもたちのいのちを慈しみ、人間として大切に作る学校・地域」を創るために、力を合わせましょう。

2011年8月21日

「みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどい  
—教育研究全国集会 2011」実行委員会